

太郎カラスの城

角田光男・作 北島新平・画



太郎カズノ城

角田光男・作／北島新平・画

太郎カラスの城

現代・創作児童文学 2

1974年 2 月／発行◎

著者／角田光男

発行者／斎藤佐次郎

発行所／株式会社**金の星社**

〒111 東京都台東区小島 1 丁目 4 ー 3
電話／東京 03—861—1506(代表)
振替／東京 64678

印刷・製本／合資会社 K・M・S

乱丁落丁本はおとりかえ致しますのでお求めの書店または本社へお申出願います。

913 角田光男

太郎カラスの城

金の星社 1974

166 P 22cm (現代・創作児童文学 2)

基本カード記載例

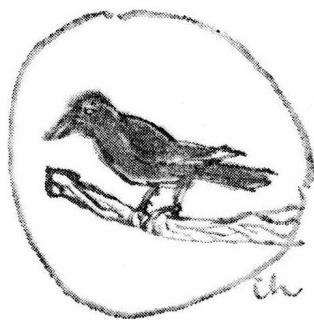
8393—042021—1406

はじめに／作者

長野県の諏訪湖^{すわこ}のほとりの小学校に、「オハヨウ」とか「サヨウナラ」などと、人間のことばを話すからがいます。学校のお友だちは、キイコと名まえをつけて、とてもかわいっています。

わたしはそれを見たとき、びっくりしたし、うらやましくつてなりませんでした。うちの近くの雑木林^{ぞうきはやし}にも、しじゅうから、しょうびたきなど、さまざまな鳥が遊びにきます。でも、おながの群れ^むががんばっているの、からすたちはおそれて近よってきません。

ところが、わたしにかわって、松原村^{ひのはらむら}のおとよばあちゃんが、からすの子どもとなかよしになってくれました。さて、どれほどのなかよしぶりなのでしょうか……。



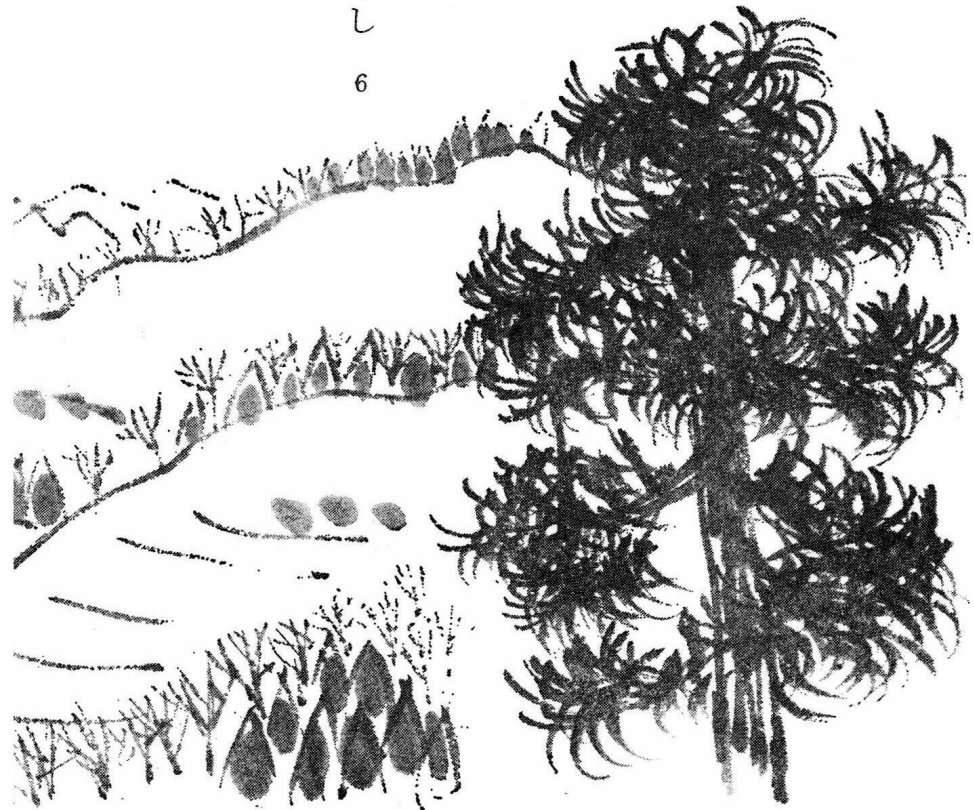
■ もくじ

はじめに

1 おく病^{びょう}がらすのきもだめし 6

2 山のどてつばらの家 21

3 秀^{ひで}さのにくまれ口 33



4 きつねつきのうわさ 51

5 ばあちゃんのろう城 じょう 67

6 町のできごと 86

7 太郎やあい 105

8 まりつき歌 127

9 からす合戦 かっせん 145

あとがき／おとよばあちゃんとのつきあい



作者・画家の紹介

角田光男 (かくた みつお)

1924年、新潟県に生まれる。20年あまり新津市の小学校で教師をつとめ、1966年上京して創作活動を続けて今日に至る。主な著者に、「つむじまがりへそまがり」「友よまたいつの日に」「怪獣の出る村」などがある。

住所＝東京都練馬区大泉学園町2607

北島新平 (きたじま しんぺい)

1926年、福島県に生まれる。長野県の中学校で教師生活をおくった後、上京して絵本や児童図書の装幀・挿画等出版界で活躍して今日に至る。主な仕事に「てんりゅう」「ひかれやしろ」などがある。

住所＝埼玉県川口市上青木町3-1373-2

太郎カラスの城

た ろ う

しろ

角田光男・作



現代・創作児童文学 2

1
おく病^{びよう}がらすのきもだめし

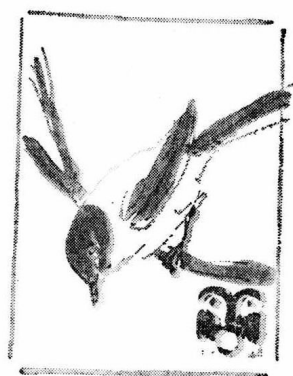
しずまりかえっていた山の空気が、おながの声で、とつぜんにかきみだされま
した。

ギユイツ、ギツ、ギツ。

おにかあくまが、齒^はぎしりでもしているかのようで、ひどくうすぎたない鳴き
声です。

「あいつら、やっぱりきたな。」

おとよばあちゃんは、こんにやくいもをほる手を休め、こしをのばしました。
ギユイツ、ギツ、ギツ。



ギユイツ、ギユイツ。

鳴き声がふえてきました。おながどもは、しきりによびあい、雑木ぞうきの枝えだから枝をわたりながら、道ちゃん坂の五本松に近よっていきます。そこにからすがいるのを見つけたからなのでしょう。

いつもの群むれにちがいありません。すばしこい鳥なので、おとよばあちゃんは、はつきりとかぞえたことがないので、十五わから、二十ばくらいいるようです。

さあ、こちらのねがいどおりになるかどうかと、ばあちゃんは、こんにやく畑につつ立ったまま、耳をすませました。

五本松の根元ねもとへ、せおいかごとじこめたからすを、おいてきてあります。ばあちゃんがかわいがっている、太郎カラスです。おながどもは、その太郎カラスを、いじめにきたのにちがいありません。

おながは、からすよりはずっと小さく、はとよりも、もっと小がらです。おばねが、すつきりと長くスマートだし、頭の上が黒いほかは、うす青色で見た目にはきれいな鳥です。けれども、鳴き声はきたないし、気が強く、けんかずきです。

人やねここにむかつて、とびかかってくることもあるほどで、とくにからすは見のがしません。かならずといていいほど、おどかしの声をたてながら、つかかっています。

「太郎、いいか、びくびくしてるんじゃないで。」

ばあちゃんがいったとき、その太郎のおびえきった声がありました。

カー、カー。

ばあちゃんに、たすけをもとめているのです。

山のどてつばらをけずってつくった、こんなにやく畑です。急な坂きゅうになっていて、ちよつとでも、からだのつりあいにくずそうものなら、はるか下の谷まで、ひといきにころがりおちてしまいそうです。そんなこんなにやく畑のまん中で、おとよばあちゃんは、二本の足をふんばりながら、太郎を上げました。

「太郎！ おっかながるな。氣ばつとれ。かごにはいつているんだから、いくらおながだつて、おまえをつつきはせんからなあ。」

太郎は、去年きょねんの夏、ばあちゃんがたすけてやったからすの子どもです。

ばあちゃんが、ふもとの数馬かずまへおりていったとき、からすのひなが、おながの



群れにおそわれ、ばたばたと、地面をにげまわっていました。巢からとびたつばかりのところを、おいかけられだしたもののようでした。数馬のおやしろの森に、からすがよく巢をつくるということですから、そこから巢だったひなとおもわれまじした。

ばあちゃんは、木の枝をふりたてて、おながどもをおっぱいましたが、からすのひなは、地面にうずくまったままでした。さんざんにおいまわされ、はばたく力さえなくしてしまつたのでしよう。

ばあちゃんは子がらすをだいて、柿台の自分の家へもどりました。

おとよばあちゃんが住んでいるところは、東京の西のはずれの桧原村です。多摩川の上流のほうに、秋川という川がありますが、村の家は、その谷あいによつて、たつています。まわりは山ばかりです。

鉄道は、五日市駅でいきどまり。そこからの山道を、バスで一時間ほど走ると終点の数馬につきます。柿台は、バスをおりてから山道を、ばあちゃんの足で四十分ものぼつたところです。だから、東京のいちばん山おくといいてもよさそうです。

六十八になったおとよばあちゃんは、そこで、たったひとりでくらしています。じいちゃん、は、五年前になくなりました。となりの清吉せいきちさんのうちは、何年前に、八王子はちおうじというにぎやかな町へおりていつてしまいました。だから山おくの一けん家で、ほんとうのひとりぐらしというわけです。

からすの子は、すぐ元氣げんきになりましたが、ばあちゃんを、自分の親おやだともいぢがいでもしたものが、すっかりなついてしまいました。山おくの一けん家からにげだすどころか、畑しごとをやっているばあちゃんの、かたやせなかにとまったり、くちばしで草をくわえてひっこぬいて、草とりのまねごとをするなどして、そばからかたときもはなれません。

からすの世話せわは、かんたんなものです。木の実みや、まめなどが大すきですが、人間のたべるものなら、ほとんどのものを口に入れるからです。ごはんどきになると、ばあちゃんとからすの子は、おなじはん台だいで食事しょくじをしました。からすの子は、ばあちゃんのたべるようすを見て、小首こくびをかたむけかたむけしてから、自分のさらにのせられたえさをつきます。なんとか、ばあちゃんとおなじかっこうができないかなあ、といったようすで――。

おとよばあちゃんはこれまでに、なんだか犬をかったことがありました。用心のためです。ところがどうしたわけか、どの犬も、半年とたたないうちに死んでしまいました。ねこだと早死はやじにすることはありませんでしたが、これまで育てていた三毛みけは、ふもとへでもおりていったらしく、すがたを見せなくなっていました。

そんなところへ、つれてきたからすの子が、なつきだしたのです。ばあちゃんは、からすの子に、太郎と名をつけてやりました。ばあちゃんのくらしが、急に明るなものにかわりました。ほんとうの孫まごができたような気分きぶんでした。

おとよばあちゃんには、三人の子どもがいます。男の子がひとり、ふたりが女の子です。男の子は小学校の先生になり、いまは、東京の調布ちようふで家をたててくらしています。女の子たちも、それぞれよめさんになっていき、ひとりは静岡しずおかで、もうひとりは大阪でしあわせにすごしています。

孫まごとなると、調布ちようふにいる道ちゃんのほか、四人もいます。どの孫も、ばあちゃんにとっては、かわいい孫です。でも太郎のかわいさは、いっしょにくらしているせいかな、とくべつでした。

ところが、その太郎は、ひどいおく病びようものでした。黒ぐろとした、りっぱなつばさをもっているくせに、うちからはなれ、遠くへとんでいくことは、まずありません。ことにおながの鳴き声がすると、いっさんにばあちゃんのそばへにげてきて、いてもたってもいられないといったかつこうで、かくればしよをさがしはじめます。ひなのときにいじめられたこわさが、まだ、心の中にこびりついているのでしよう。

からすもおながも、山おくよりは、村とか町の近くに住すむ鳥です。ことにおながは、数馬かずまや柿台かきだいにすがたをあらわすことは、めったにありませんでした。ところが、太郎をいじめていたおながの群むれは、いつまでも、このあたりをうろついています。柿台までも、おりおり山まわりにやってきて、太郎をおどかすのです。おとよばあちゃんは、おく山でひとりぐらしをつづけているだけあって、負けずらい。びくびくした気分でくらすのなんて、大きらいです。だから、からだの大きな太郎が、おどおどしているのが、がまんできません。

そこで、「太郎をきたえてやらにゃー」と、せおいかごの大きなのに太郎をとじこめ、五本松の根元ねもとへ、おきざりにしてきたわけです。つまり、おく病太郎に

きもだめしをやらせたようなものでした。

その五本松での、おながどもの齒^はぎしりの声が、一だんとはげしくなりました。太郎は、かごからにげだそうともがきまわっているのでしょうか、声はきこえなくなりました。

「ちつとのあいだのしんぼうだい。氣ばつとれや、太郎！」

ばあちゃんは、つくしの柄^えをにぎりしめ、畑に、ぐさりぐさりとつきたてながら、ここからは見えない太郎のおうえんです。つくしは、こんにやくいもをほりおこす道具^{どうぐ}で、一メートルほどの木の柄^えに、先^{さき}が二またに分かれた鉄^{てつ}のぼうをはめこんだものです。ちよつと見たところ、さかなをつくやすに、にています。

むちゅうになつたばあちゃんが、つくしを自分の足につきたててしまい、顔をしかめたときでした。太郎がけたたましく鳴きました。

「バアチャン、バアチャン！」

それをきくと、ばあちゃんは、もうがまんしていられなくなりました。つくしをにぎりしめたまま、よつんばいになって、こんにやく畑をよじのぼりだしました。